「心定め」を守り通す

教会への日参を心定め。動かぬ心を見定めて、親神様は鮮やかな理をお見せくださる。

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

定めるも定めんも定めてから治まる。治めてから定まるやない。定めてから治まる。……定めて掛かって神一条の道という。　明治24年11月3日

と仰せいただきます。

私たちは、大きな節目や、身上、事情をお見せいただいたときなど、親神様に真実をお受け取りいただこうと「心定め」をします。しかし、私たちの心は、些細（ささい）なきっかけですぐに変わってしまうため、定めた心を動かさないことがとても難しく、心定めが続かなかった経験はないでしょうか。

心定めとは努力するための目標ではなく、いわば神様との約束です。「どんなことがあっても、この約束は守ります。絶対に心を動かしません！」と覚悟が固まったその瞬間、親神様はすぐにその心定めを受け取ってお働きくださいます。先回りの御守護により、抱えていた身上や事情のもつれが鮮やかに解決し、「定めてから治まる」ことを実感するのです。

教祖年祭に向け、まずは教祖にお喜びいただける心を定めること、そしてそれを最後まで固く守り通す決意をして、三年千日に臨みたいと思います。

青年会長様ご臨席
芦津分会総会
8月28日（日）於・大教会

四方正面

数年前に近所から頂いた黒竹の鉢植えが、新芽を出さなくなっていた。

そこでこの春に、いくつかに根分けをして土を入れ替えることにした。調べると、植え替えの時期も暑くなる前までが適しており、旬が過ぎると根が弱り、枯れてしまう原因となるとのこと。植え替える土も、数種類配合した柔らかい土にする必要がある。いざ鉢から出すと、根が隙間なく混み合い、土もカチカチに固まっていた。こうして手間暇をかけて数鉢に植え替えをした黒竹は、今では新しい芽が成長して、涼しげな葉を茂らせている。

来る年祭活動に向けて、心の下地づくりを進める今。旬を外すことなく、知らずと自分勝手な思案で凝り固まった心を、まずは柔らかく優しい心へと入れ替えて、陽気ぐらしへの新しい芽を出させていただきたい。（西）

《６月月次祭　挨拶》

年祭の意義をお仕込みいただいて

大教会長　井筒梅夫

皆様方には日頃から道の御用の上にご丹精をくださり、誠にご苦労様です。只今は２年５カ月ぶりに世話人先生のご巡教を頂いて、共々に６月の月次祭を滞りなく勇んで勤めさせていただきました。大変有り難い次第です。

今、島村先生からいろいろとお話を頂戴いたしました中で、子供可愛い故、また子供の成人をお急き込みくださる上から、25年の定命をお縮めになって、お姿を隠された教祖の親心にお応えさせていただくことが、教祖の年祭を勤める意義であるということを改めてお仕込みいただきました。

教祖が、なぜ現身（うつしみ）を隠されたのか。それはそれまで厳しくお急き込みくださったおつとめを、誰はばかることなく勤めることができるようにとの親心であった。それを思うときに、教祖から教えていただいたおつとめを真剣に勤めさせていただくことが、教祖の親心にお応えすることになると思います。

また存命の理として、新たなたすけの世界へ扉が開かれた元一日でもあります。そして、広くおさづけをお渡しくださることになって、このおさづけの上に御存命の御守護を現され、先人たちはこのおさづけ一つを抱えてにをいがけ・おたすけに奔走されて、道は破竹の勢いで伸び広がりました。先人はおさづけの上に現れてくる御守護に「なるほど、教祖は御存命でお働きくだされているのだ」という確信を持たれ、さらに勇んでたすけ一条に進まれたのです。

教祖がお教えくださったつとめとさづけに、しっかりと真実を尽くすことが、教祖の親心にお応えする一番の道であると、今日のお話を聞かせていただいて、改めて私は心に刻ませていただきました。

また、ぢばの理の尊さもお仕込みくださいました。私たちの信仰はおぢばがあってお道があります。また、おぢばがあってこの世界があるのですから、おぢばにしっかりと心を繋（つな）ぎ、足も運び真実を尽くして、この道をしっかりと歩ませていただいて、教祖の年祭活動に向かいたいと存じます。

さて、新型コロナウイルスの感染が国内で広がりを始めてから約２年半が経ちました。今年の「こどもおぢばがえり」も中止になりましたが、それに代わるものとして７月26日から８月28日まで、子どもたちの受け入れの行事を用意してくださっています。

昨年に引き続いて、「夏休みこどもひのきしん」が実施されますが、それ以外にも、西泉水プール前広場では「ピッキーひろば」が行われます。南右第２棟では「ほんわかシアター」「ピッキーとリボンの宇宙体験」「みちの子作品展」「みちのこサマーステージ」とさまざまな行事が行われます。また、天理参考館では「おやさと謎解きウォークｉｎ参考館」という、新たな試みがなされます。さらに、「少年ひのきしん隊本部練成会」が実施されます。これは各教区に申し込むことになりますが、わかぎがおぢばで伏せ込む機会が復活いたします。また、「特別企画鼓笛お供演奏、オンパレード」も開催されます。これは鼓笛隊の隊員にとっては大いに励みになることでしょう。また、「夏休みさんさいの里キャンプ」も昨年に続いて実施されることになっています。

こうしたことは、子供たちが夏のおぢばを楽しめるように、ご本部の親心から長期間に渡って受け入れの行事を開催してくださるのです。こどもおぢばがえりほどの大規模なものではありませんが、きっと楽しい思い出になるでしょうし、おぢばに帰った喜びを子供なりに味わえると思います。これを子弟の育成に活用しない手はないと思うのです。

ようぼくとして成人させていただくには、おぢばへ足を運ぶことが欠かせないことは、道の歴史が証明しているところです。このぢば・親里に子どもの頃から足を運ばせることは、信仰心を育む上で大切なことだと思います。

船場大教会の初代・梅谷四郎兵衛先生は、息子の梅次郎さんが5、6歳の頃、お屋敷へ一緒に連れて帰ったところ、赤衣を召されていた教祖を見て「達摩はん、達摩はん。」と言ってしまった。これに恐縮した四郎兵衛先生は、次は息子さんを連れて帰らなかった。すると教祖が「梅次郎さんは、どうしました。道切れるで。」と仰られた話は有名であります。「梅次郎さんは、どうしました。道切れるで。」というお言葉は、裏を返せば「おぢばに連れて帰れば道は繋がるで」というお言葉にもなるわけです。それ以来、梅次郎さんは両親に連れられておぢばへ帰るようになって、二代会長として立派に務められるようになるのです。

新型コロナ感染の心配や、また遠方ならば費用の問題など、クリアしなければならないことはいろいろとありますが、そうした中にも、できる努力はさせていただいて、子供におぢばへ帰る喜びを味わってもらい、魂に徳を積ませるように、子弟育成の上に丹精をさせていただきたいと思います。

8月28日は、真柱継承者であられる中山大亮青年会長様に大教会にお入り込み頂いて、青年会芦津分会の御臨席総会を開催いたします。これが芦津として今年一番の大きな動きになります。この御臨席総会は、芦津の理に繋がる若い世代の者が、親の理を受ける総会です。

何でも親という理戴（いただ）くなら、いつも同じ晴天と諭し置こう。
明治28年10月24日

これは井筒梅治郎初代様が身上のときの伺いで戴いたおさしづです。当時の初代様の心は晴天ではなかったのでしょう。曇天か雨か雪か、もしかしたら嵐のような状態であったかもしれません。私たちも日々嬉しいことや楽しいことばかりではありません。心が曇ったりいずんだり、時には人に言うに言えない、泣くに泣けない道を通るときもあるわけです。しかし、そんなときにこそ親の理を戴くことで、どんな状況下でも晴天の心で通れる、晴天の御守護を頂けるとお約束していただいているおさしづです。初代様はこのお言葉にどれだけ励まされたことでしょう。

今回の御臨席総会が親の理を戴く総会であることを思えば、今の青年会員にとって千載一遇の機会です。大げさに聞こえるかもしれませんが、この総会で人生が変わったという若者が出てきても不思議ではないと、私は思っています。

今回の御臨席総会は、青年会員はもちろんのこと、女性を含めた若い世代の者たちに、直接親の理を戴いてほしいと考えています。私たちの後に続く若い世代の人たちが総会に足を運んでくれるよう、どうか積極的に呼びかけてくださると共に、これからの道を背負っていく若者の丹精に心を配ってつとめてくださることを重ねてお願いいたしまして、今月の月次祭の挨拶とさせていただきます。

今日の月次祭、大変ご苦労様でございました。

（要約）

《６月月次祭　神殿講話》

教祖百四十年祭に向かって
教祖にお喜びいただける心で通ろう

世話人　島村廣義　先生

教祖百四十年祭を目指して

本年１月４日、真柱様は年頭のご挨拶で、道を進展させるためには、教祖の年祭を勤めることは大切と、教祖百四十年祭を勤める旨を述べられました。さらに年祭の意義を徹底させるために、伝える側の姿勢について、普段から教えを身に行い、成程の人となる努力を怠らないよう、仰せくださいました。

また『みちのとも』６月号には、教祖百四十年祭を勤める三年千日を前にして、教会長が何をすべきかについて、内統領、表統領がインタビューに答え、３つにポイントを絞ってお話しくださいました。

１つ目は、なぜ教祖の年祭を勤めるのかという、「教祖の年祭の意義」を教会長としてしっかり心に治めること。

２つ目は、教会の現在の姿をしっかり確認、把握すること。お預かりしている教会の将来の姿を長い目で思い描いて、それを実現していけるよう、順序立てて進むことが大切です。百四十年祭は、そうした目標に向かうための一つの節としたい。

３つ目は、年祭に向かっての心構えをすること。特に年祭活動にあたっては、おさしづをもって厳しくお仕込みくださっていますが、三年千日の通り方です。お互いに覚悟を決め、腹を据えて、取り組ませていただきたい。その心構えをしっかり定めて通ることと、それを全教に及ぼしていくことが大切です。

年祭を勤める意義

教祖の年祭は、私たちの親や先祖の年祭のように、親戚や親しかった者が集まって、故人の遺徳を偲び讃えるものではありません。

さあ〳〵これまで住んで居る。何処（どこ）へも行てはせんで、何処へも行てはせんで。日日の道を見て思やんしてくれねばならん。

明治23年３月17日

教祖は存命の理をもって、今も変わることなく元の屋敷にお留まりくださり、世界たすけの道の先頭にお立ちくだされて、私たちをお導きくだされているのです。

月日にハせかいぢうハみなわが子かハいい、ばいこれが一ちよ

十七号　16

月日にハせかいぢう、ハみなわが子たすけたいとの心ばかりで

八号　4

いちれつのこともがかハいそれゆへにいろ〳〵心つくしきるなり

四号　63

子供可愛い故のたすけ一条の親心で私たちをお見守り、お育て、お導きくださっているのです。私たちは、教祖からおかけいただく親心をしっかり受け止めて、思召に沿い、教祖のひながたの道を真剣に歩んで、陽気ぐらし世界の実現を目指して、たすけ一条につとめ切ること。これが教祖にお喜びいただく一番の道です。

教祖の年祭を勤めさせていただくその元は、子供の成人を急き込みくださる上から、教祖が定命を25年お縮めになり、現身をお隠しになられた、明治20年陰暦正月26日の事情に由来します。それは世界一れつをたすけるために、一日も早く陽気づくめの世の状（さま）に立て替えてやろうと思召す親心から、たすけ一条の道としてお教えくだされたおつとめを、誰に気兼ねすることなく勤めることができるようにしてくださったこと。また、誰はばかることなく世界の人々ににをいがけ・おたすけできるようにしてくださったこと。それは子供可愛い故の親心からです。

教祖は御存命

親神様は、教祖の切迫する身上を台として、たすけ一条のつとめの勤修を急き込まれるとともに、あらゆる人間思案を断ち切り、ひたすら親神様を信じもたれ切って通る神一条の道の通り方を厳しくお仕込みくださいました。

『稿本天理教教祖伝』を拝読しますと、初代真柱様を芯に、先生方が命がけでおつとめを勤められた様子が記されています。続いて、教祖が現身を隠されたときのご様子と、先生方の驚愕、落胆された様子が記されています。

官憲の迫害、干渉の中、仰せ通りおつとめをさせてもらうと、教祖に直接御苦労をおかけする。その御苦労を思うとなかなかおつとめに踏み切れなかった先生方のご苦衷は、私たちの想像以上のことであっただろうと思案します。

それでも教祖の御身上を台にしてつとめの決断を促される厳しいお仕込みに、一同心を定め、命捨ててもの覚悟のもとにおつとめを勤められたのです。その結果、教祖が現身を隠されるという事態になってしまった。

しかし、飯降伊蔵先生を通しておさしづを伺われると、

さあ〳〵ろっくの地にする。皆々揃うたか〳〵。よう聞き分け。これまでに言うた事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。扉開いてろっくの地にしようか、扉閉めてろっくの地に。扉開いて、ろっくの地にしてくれ、と、言うたやないか。思うようにしてやった。さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。よう聞いて置け。

明治20年2月18日

とのお言葉でした。

子供可愛い故の親心で、子供の成人を促されるとともに、現身を隠されることによって、おつとめを勤めることに踏み切れなかった原因を取り除かれた。今からいよいよ、世界を駈け巡ってたすけをする。そして、広く一般におさづけの理をお渡しくだされるとともに、積極的な世界たすけの道、たすけ一条の道の展開をお促しくだされたものと思案するのです。

その後、先人たちは、教祖が御存命でお働きくださっていることを信じ、教祖の親心に全身全霊を捧げてお応えしたいとの固い信念でおたすけに奔走し、全国各地でおさづけの取り次ぎに真実を尽くす中、次々と不思議珍しい御守護をお見せいただきました。

教祖十年祭が執行された明治29年には、お道は全国津々浦々まで伸び広がり、教会も全道府県に設置され、布教線は海外にまで及びました。それは懸命におたすけに奔走くだされた人々の真実を教祖がお受け取りくださり、お働きくだされた結果であり、教祖御存命のお働きに外なりません。教祖のお姿は拝せなくとも、存命でお働きくださっているとの確信、感激は、さらなるたすけの輪となり広がっていったのです。

たすけ一条、神一条

以後、10年ごとの教祖の年祭を仕切りとして成人の歩みを進め、教祖にお喜びいただきたいと懸命に歩んできたのがこのお道です。

教祖年祭の元一日を思案すると、改めて教祖のお急き込みは、たすけ一条の道の根本であるつとめの実行にあったこと、さらに親神様の思召に沿い切る神一条の精神定めであったことと思案します。

先人先生方は、神一条の道と世

上の道との間で、どのように進めばよいのかを常に教祖のひながたに求め、思案を重ね、親の思いに近づく努力を繰り返し続けて通られた中に、節から芽が出る御守護を頂戴してこられました。

それは、これから教祖百四十年祭活動に向かって道を歩む私たちが、成人の足取りを進める上で学ばねばならない、尊い道すがらです。いかなる困難な中も勇んでお通りになった先人に倣い、親神様の思召に沿い切って、御存命の教祖にお喜びいただけるよう、確固たる神一条の精神を定めて歩みたいと思います。

親神様の御守護

親神様はこの世人間をお創りくだされた元の神様です。人間が生きる上に必要なあらゆるものを整えて、命を与えられ、陽気ぐらしができるよう心配りをし、御守護くだされています。

たん〳〵となに事にてもこのよふわ
神のからだやしやんしてみよ
三号　40

このお歌と全く同じお歌が、同じ第三号135にお述べくだされています。そしてこれらのお歌の後には、どちらもかしもの・かりものの御守護が説かれています。

第三号40のお歌の後には、

にんけんハみな〳〵神のかしものや
なんとをもふてつこているやら
三号　41

同135のお歌の後には、

このたびハ神がをもていでゝるから
よろづの事をみなをしへるで
三号　136

めへ〳〵のみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん
三号　137

世の中のものは全て親神様のお創りくだされたもので、全宇宙は親神様のお身体である。従って、人間もすべて自分の力でできたものではない。私たちは、親神様のお創りくだされたものを親神様から貸していただいて、天地抱き合わせの親神様の懐で、親神様の御守護によって生かされているとお教えいただきます。

このかしもの・かりもののご教理が心に治まれば、親神様の十全の御守護、私たち人間の生きる目的、その生き方など、教えの全てが分かるのです。

人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、どんな理も日々出る。どんな理も受け取る中に、自由自在という理を聞き分け。　明治22年2月14日

日々元気に、何不自由なく身体を使わせていただける喜び。当たり前と思っている日々の暮らしこそ、親神様の有り難くもったいない御守護であることに気付けば、生かされている喜びを味わうことができる。

教祖は「貧に落ち切れ」との親神様の思召のままに、貧の道中をお通りくださり、食べるに米のない日をお過ごしくだされる中も、子供たちを励ましながらお通りくださいました。

私たちの身の周りには、身上や事情など、思うようにならないことで心を曇らせたり、喜べないことがあります。しかし、かしもの・かりもののご教理、親神様が大難を小難に、小難を無難に御守護くださっていること、さらには節に込められた親心に気付くことで、今まで喜べなかったことも心から喜べるようになり、今まで楽しめなかったことも心から楽しめるようになるのです。

あちらでも喜ぶ、こちらでも喜ぶ。喜ぶ理は天の理に適う。適うから盛ん。明治33年7月14日

喜べる中を喜んで通ることは誰にでもできますが、喜べないところを喜びの心で通らせていただくのが、教祖のひながたです。

ぢばはたすけの源

別席のお話に、このお屋敷は、親神様が人間世界をお創（はじ）めくだされたいんねんある屋敷であり、世界中の人間の元の親里であると仰せいただきます。また親神様がお鎮まりくだされ、教祖が御存命でお見守りくださる場所です。

帰ってくる子供をお待ちかねになっているのが親の御心であり、親を慕って帰る子供の真実が親の

御心に通って、珍しいたすけをお見せくださる。ですから、元のぢばへ真実の心を運ぶことが肝心で、たすけの源であるぢばを慕って帰るのが、おぢば帰りです。

自らの身上・事情のおたすけを願って、あるいは人様のおたすけを願って、さらには結構に御守護いただいたことへのお礼にと、おぢばへ帰る理由に違いはありましょう。その理由が何であれ、そこに親神様の深い思惑があって、おぢばへお引き寄せいただくのです。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』に、

「おまえは、神に深きいんねんあるを以て、神が引き寄せたのである程に。病気は案じる事は要らん。直ぐ救けてやる程に。その代わり、おまえは、神の御用を聞かんならんで。」

一一「神が引き寄せた」

さあ〳〵いんねんの魂、神が用に使おうと思召す者は、どうしてなりと引き寄せるから、結構と思うて、これからどんな道もあるから、楽しんで通るよう。用に使わねばならんという道具は、痛めてでも引き寄せる。悩めてでも引き寄せねばならんのであるから、する事なす事違う。……」

三六「定めた心」

おぢばへ帰ることは、親神様の思惑があって、たすけ一条の御用にお使いくださるため、それぞれに相応しい手引きをしてお引き寄せくださるのです。

たすけの実践

教祖は、にをいがけ・おたすけの実践をお促しくだされています。

「……かえったら、村の中、戸毎に入り込んで、四十二人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻わるのやで。人を救けたら我が身が救かるのや。」

四二「人を救けたら」

「……救けてもらい嬉しいと思うなら、その喜びで、救けてほしいと願う人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。」

七二「救かる身やもの」

と、たすけていただく道として、神様の話をしてにをいがけすることや、おたすけいただいたお礼の御恩報じの道を教えられました。

さらに、

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」

「これは、御供やから、これを、供えたお水で人に飲ますのや。」

一〇〇「人を救けるのやで」

と、御供や御神水を頂かせて人をたすけて回ることをお促しくださいました。

また、

「……この屋敷は、用事さえする心なら、何んぼでも用事がありますで。用事さえしていれば、去のと思ても去なれぬ屋敷。せいだい働いて置きなされや。先になったら、難儀しようと思たとて難儀出来んのやで。今、しっかり働いて置きなされや。」

三七「神妙に働いて下されますなあ」

と、ぢばに誠真実を尽くし運ぶこと、真心を伏せ込むことがいかに大切で有り難いことかをお教えくださいました。

先人たちは、たすけていただきたい一心でおぢばに帰らせていただき、教祖の親心にお縋りして、素直に道を通られる。その結果、不思議珍しいたすけの御守護を頂かれ、その感激と喜びに、御恩報じのたすけ一条の道を歩まれるようになったのです。

今日の私たちは、親々から信仰を受け継ぎ、原典や教典、稿本教祖伝によって、いつでも親神様の思召を拝することができ、教祖のひながたを求めることができる結構があります。

まだ親神様を知らず、その思召を分からずに身上や事情に悩み苦しんでいる人々に、一日も早く御教えを伝えることが、私たちの務めです。先人たちが、素直に教祖のひながたを求めてお通りくだされた道すがらに倣い、積極的なおたすけを心がけて、一人でも多くの方々をおぢばにお連れし、教祖にお喜びいただきたいと思うのです。

つとめとさづけ

教祖は世界一れつをたすけたいとの親心で、私たちをお見守りくださっています。そしてたすけ一条の道としてつとめを教え、さづけをお渡しになって、その実行をお促しくださいます。

ようこそつとめについてきた
これがたすけのもとだてや
六下り目　四ツ

いつもかぐらやてをどりや
すゑではめづらしたすけする
六下り目　五ツ

おつとめはたすけの根本の手立てであり、人だすけの元立てであると共に、自分自身もたすけていただける元なのです。親神様は元の神・実の神であり、元を立てるから、お互いの理が立つのです。

にち〳〵にはやくつとめをせきこめよ
いかなるなんもみなのがれるで
十号　19

とのよふなむつかしくなるやまいでも
つとめ一ぢよてみなたすかるで
十号　20

つとめさいちがハんよふになめたなら
天のあたゑもちがう事なし
十号　34

はや〳〵と心そろをてしいかりと
つとめするならせかいをさまる
十四号　92

つとめてもほかの事とわをもうなよ
たすけたいのが一ちよばかりで
十六号　65

おつとめはたすけ心をもって勤めることが大切です。人々の身上、事情をはじめ、心の治まり、世の中の治まり、よろづのたすかりを親神様に願い、祈る。たとえおさづけの取り次ぎができないときでも、おつとめによって親神様にたすけを願うことができる。

教会で勤めるおつとめは、よろづたすけの源であるぢばで勤められるかぐらづとめの理を受けて勤めます。おつとめ奉仕者を揃え、道具を揃えて、ぢば一条に心を揃えて、一手一つに勇んで人々のたすかり、世の中の治まりを願って勤めることが大切です。

さらに、身上に苦しんでいる人には、真心を込めておさづけを取り次がせていただくのです。

人を救ける心は真の誠一つの理で、救ける理が救かる。
おかきさげ

「救からんものを、なんでもと言うて、子供が、親のために運ぶ心、これ真実やがな。真実なら神が受け取る。」
『逸話篇』一六

子供が親のために

「何でも、どうでもたすかってもらいたい」という真実の行為こそが、親神様に受け取っていただく誠真実です。

たん〳〵とよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで
十五号　60

このよふをはじめたをやか入こめば
どんな事をばするやしれんで
十五号　61

おさづけは、人だすけのための宝です。「何としてもたすかっていただきたい」との誠真実に、親神様、教祖がお働きくださるのです。また、おさづけの取り次ぎによって、教祖が御存命でお働きくださっていることの有り難さを実感することができるのです。

ようぼくは、この尊いおさづけの理を頂戴した元一日の心を忘れず、機を逃さず、躊躇（ちゅうちょ）することなく、積極的に病む人におさづけを取り次ぎましょう。年齢、性別、立場にかかわらず、自分にできるおたすけを見出し、いつでもどこでも、おたすけを心がけましょう。

ぢばに心を繋ぐ

無縁社会と言われる昨今、また新型コロナウイルスの蔓延で人との繋がりがなく、寂しい思いを味わっている人は多いのですが、それを他人に打ち明ける人は少ない。概して人は、自分の抱えている悩みや苦しみについて他人に隠すことが多いため、１度や２度の声掛けでは容易に心を開いてはもらえません。常に教えを実践し、親しく声をかけ続け、自分を信用していただけるまで人間関係ができてくるに従って、だんだんと悩みごとの相談を持ち掛けられるようになるのです。

困っている人に出会えば、おたすけの心で、誠心誠意お世話をさ

せていただく。悩みに耳を傾け、相手の苦しみを思いやり、分かち合う。不安を抱えている人には、親神様を信じ、もたれ切って通ることの有り難さを伝え、心の向きが変わるように導く。相手の身になり、心を砕いて根気よく導き、さらには、共々に人だすけに向かうまでに丹精する。

こうしておたすけに取り組む上で、親神様にお働きいただき、御守護を頂戴するためには、しっかりとぢばに心を繋ぎ、誠真実を尽くし、運ぶことが大切です。

先人たちの道すがらを振り返ると、そこには御守護を願い、すがる思いでぢばに足を運ばれた姿がありました。

残らずぢばから救ける。万事何から大切、第一のたすけ、ぢばより救ける。明治24年11月23日

ぢばは親神様のお鎮まりくださるところ、御存命の教祖のおわすところ、たすけの源です。たすかる理は、ぢばにしっかりと繋がるところからお与えいただくのです。ぢばへ尽くし運ぶ私たちの真実を、親神様は必ずお受け取りくださり、真実に相応しい御守護をお見せくださいます。

誠真実の心

このさきハせかいぢうハ一れつによろづたがいにたすけするなら月日にもその心をばうけとりてどんなたすけもするとをもふよ　十二号　93

人をたすける心、それは誠の心です。それは思召に沿い、天理に適う心だからです。親神様はこの誠真実をすぐと受け取って、いかなるたすけもお引き受けくださいます。

しんちつに心にまことあるならばどんなたすけもちがう事なし　十三号　71

誠一つの理は天の理、天の理なれば直ぐと受け取る、直ぐと返えすが一つの理。　明治23年4月17日

心に誠真実の理が治まれば、常に変わらぬ喜びに満たされます。人がたすかってくださった感激、そして何より親神様、教祖がお喜びくださっているという喜び。おたすけの喜びは何物にも代え難い、道を通る者の喜びです。

その喜びは一人にとどまることなく、家族、隣人へと広がり、土地所の陽気ぐらしの姿となって現れてくるのです。ようぼくが世界の各地でたすけに歩む姿を、親神様、教祖は心楽しみにしてくださっています。

陽気ぐらしの手本に

新型コロナウイルスの猛威は、まだまだ収まりを見るにはほど遠い状況です。また近年、世界各地で集中豪雨、地震や火山の噴火など、大きな災害が頻発しています。また、他を顧みない自分中心の行動は争いごとを引き起こし、世界に陽気ぐらしとは正反対のことをもたらしています。

このような社会の混迷が続く今だからこそ、私たちようぼくの真価を発揮するときです。世の中が治まる真実の教えを、自分を取り巻く身近なところから世界の人々へ伝え広めるため、ようぼくはまず教会に繋ぎ、親神様、教祖に心を繋いで、おたすけに立ち上がらせていただきましょう。

教会は世界たすけを推し進める上で、なくてはならない拠点です。教会の活動は親神様の教えを伝え広めることです。国々所々の教会の動きが活発になり、悩み苦しむ人にとって心安らぐ場所となり、土地所の陽気ぐらしの手本雛型となれるよう、会長を芯として寄り集う人々が心を合わせ、たすけ合い、陽気ぐらしの雰囲気をつくり出していくのです。

教会は昔から、身上に悩む人、身寄りのない人、あるいは布教専従を志す人たち、さまざまな人を受け入れて、たすけ合って歩んできました。教会というたすけの道場に、ようぼく一人ひとりのたすけ心が繋がり合い、大きなおたすけの和、陽気ぐらしの和をつくり出してきました。

三年千日を仕切って

来年はいよいよ教祖百四十年祭

に向かっての三年千日の活動に入る年。今年は万全を期して、その心準備をさせていただく年です。

先人たちは教祖の年祭を成人の旬として、教祖の親心にお応えさせていただきたい一念で勤めてこられました。私たちようぼくにとって教祖の年祭は、成人の足取りを進めるかけがえのない節目、仕切りです。

どうでも一つ、仕切り根性、仕切り力、仕切り智慧、仕切りの道、どうでもこうでも踏まさにゃならん。　明治40年5月8日

難しい事をせいとも、紋型無き事をせいと言わん。皆一つ〳〵のひながたの道がある。ひながたの道を通れんというような事ではどうもならん。（中略）なれど十年経ち、二十年経ち、口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通りたのやない。僅か五十年。五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えばいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。何程急いたとて急いだとていかせんで。ひながたの道より道無いで。　明治22年11月7日

教祖は御自身がお通りくだされた50年のひながたの道を、三年千日通れば50年の道を通ったことと同じ理に受け取ってやろうと仰せくださいます。三年千日、ただひたすらに教祖のひながたを実践するとき、教祖は深く大きな親心をもって、私たち子供の足りないところを補って受け取る、と仰せくださるのです。ようぼく一人ひとりが三年千日、仕切ってひながたの道を通る決意を定めたいと思います。

心を合わせ頼もしい道を作りてくれ。あれでこそ真の道であると、世界に映さにゃならん。

明治35年9月6日

御存命の教祖にお喜びいただけるよう、共々につとめ励ませていただきましょう。（要約）

立教百八十五年　六月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の絶えざる御守護にお護り頂き尽きせぬ親心にお導き頂きまして、成人の歩み差なくお連れ通り下され、陽気ぐらしに向かうたすけ一条の道の上に数数の結構な理をお見せ下さいます御慈愛の程は、誠に有り難く勿体ない限りでございます。

私共は、親神様の思召にお応えできるよう、心のほこりを払い胸の掃除に励んで、御恩報じの精神でようぼくとしての勤めに励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃えて、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、六月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な日と参り集いました芦津の道の子達が、日々に賜る御恵みに拝謝し、人々のたすかりと世の治まりを御祈念申し上げて、共々に心勇んでお歌を唱和する真実の心をお受け取り下さいまして、親神様にもお勇み下され、たすけ一条の道の一層の前進の御守護を賜りますよう御願い申し上げます。

今年の折り返しの節目を迎えて、私共をはじめ、芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、来る教祖百四十年祭活動を一手一つに心勇んで勤めることのできるよう、教祖にお喜び頂けるような心づくりに日々勤しみ、御教えの実行実践に励んで理づくりに努めて、確かな心構えで三年千日に臨ませて頂く所存でございます。

又、今日の月次祭に島村廣義世話人先生のご巡教を頂いて、おぢば直々の理をお聞かせ頂きますが、これを成人の糧に、心をぢば一条に正して、信心の道に一層励ませて頂きます。

何卒至らぬ点は幾重にもお仕込み下さいまして、各々の心の成人をお導き下され、たすけ一条の道の上には不思議自由のお働きを賜りまして、教祖御年祭を良き節として、道の行く手に大きな希望と喜びをお見せ下され、一日も早く陽気世界へお連れ通り下さいますよう御守護の程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

喜びの奉告祭

三代会長就任奉告祭

大笠利分教会

大島部属大笠利分教会（鹿児島県奄美市）は6月12日、元見健一三代会長就任奉告祭を執り行った。

午前10時30分、元見会長の祭文奏上。初代、二代の信仰を振り返り、次なる塚に向かって新たなスタートを誓った。続いておつとめを陽気につとめ、栄安文・奄美笠分教会長が、加世田洋・大島分教会長のお祝いの言葉を代読。「素直な心で、ようぼくの皆様と心一つに年祭活動に進んでください」と激励した。次に元見会長が挨拶。「親の声を頼りにようぼくの皆様と一手一つにたすけ一条に励ませていただきます」と決意を述べた。

元見利二・前会長夫婦の御礼の挨拶があり、花束が贈呈された。その後はお弁当が配られ、和やかな直会となった。

参拝者は42名だった。

木綿の会を開催

婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は6月29日、大教会陽気ホールで、子育て中の婦人を対象とした木綿の会を開催した。

はじめに、教祖の御心を学ぼうと『稿本天理教教祖伝逸話篇』の勉強会を行い、続いて扇を入れる袋を制作した。

参加者からは、「同じ立場の者同士、いろんな話ができ有り難かった」との声が聞かれた。

参加者は、婦人会員20名、少年会員9名だった。

六月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扉者	川畑澄博	扉者	山本義範		
指図方	瀧本眞二郎	賛者	石川健郎	賛者	湯川正信		
献饌長	岩切正教	伝供	在籍者一同				
てをどり	大教会長	井筒文夫	石川道夫	会長夫人	前会長夫人	浜田たつゑ	座りづとめ
	山田道弘	吉田裕和	梶川和隆	宗我邦代	吉田幸子	岩切孝子	前半
	石川健郎	岡本久昭	新居里実	梶川文子	山本広子	石川石美	後半
地方	湯川正圀	岩切正教	奥田眞治	加世田洋	河端芳雄	西本義之	前半
	中村俊和	川畑正博	望月慶太	榎川康紀	西本興正	今川聖一	後半
笛	今川政治	岡島秀男	井筒敏成	守田清一	瀧本眞二郎	竹内義忠	小鼓
ちゃんぽん	蔑内浩	浜田宣郎	岩切正義	瀧本庄司	木村真次	立花善三	すりがね
拍子木	井筒ちぐさ	榎理恵子	岡島きよの	岡本たねよ	望月恵美	松森明美	太鼓
琴	奥田千晶	木村理恵	湯川照代	花岡忠和	吉田裕樹	今川聖一	三味線
胡弓							

会長室報

青年勤務

【詰所会長宅】

山田　元喜（當　別）

立教185年６月23日

教務部報

修養科教養掛（４～６月）

教養掛主任

瀧本　庄司

教養掛

瀧本一太郎・田中　敏行
瀧本耕四郎・荒木　志朗
岩切　正晴・瀧本　理恵
岡本たねよ

教会長資格検定合格

宗我　道明（吉野川）
大西　直喜（上　郡）

立教185年６月16日教会長資格検定講習会第122回を修了し、翌17日検定合格されました。

修養科第970期修了

大瀬戸敬司（笠　戸）
徳野　真弘（紀　周）

立教185年６月27日

三日講習会Ⅲ修了

奥田　大介（周　宝）

立教185年６月５日

おさづけの理拝戴《５月》

星原　優輝（苅田町）
中村　陽菜（芦　浪）
豊田富美子（直　轄）
吉田　正菊（直　轄）
佐藤　みり（有　家）
原田　小春（笠　戸）
竹中　司（直　轄）
反保　英雄（紀　周）

〈拝戴日順　８名〉

○期間　７月26日～８月28日

※各会場で開催日、開催時間は異なります。
下のＱＲコード、少年会本部公式 LINE を登録し、ご確認下さい。

○会場

・「ひのきしんセンター」
（受付９時～ 16 時）

ひのきしんセンターの場所

西泉水前広場
・「ピッキーひろば」

南右第２棟
・「ほんわかシアター」（地下１階）
・「ピッキーとリボンの宇宙体験」（地下２階）
・「みちの子作品展」（１階）
・「みちのこサマーステージ」（陽気ホール）

天理参考館
・「おやさと謎解きウォーク in 参考館」

《その他の特別企画行事》

・「少年ひのきしん隊本部練成会」
・「特別企画鼓笛お供演奏、オンパレード」
・「夏休みさんさいの里キャンプ」

※行事参加の予約や事前申込はありません。
※期間中の本部食堂での喫食はできません。
食事希望は事前に詰所へ申込下さい。

少年会本部
公式 LINE

月例統計（自令和４年１月１日～至令和４年５月31日）

名称（）内教会数 ＼ 項目	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	9		
靱（13）				
東津（23）	1	2	1	
吉野川（29）		1	1	1
島原（16）	5	1		
日方（15）	3			1
稗島（7）				
本津（2）				1
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）				
門司（6）	1	1		
當別（6）	1			
大島（26）		1	1	
沖縄（3）		1	3	
尼崎（2）	1			
四ツ山（5）		1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）		1		
青木（1）				
芦浪（1）		1		
甲邊（1）	1			
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）	1			
紀周（3）	1	2		
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）		2		
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	1			
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1			
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	26	23	6	3